

「ボギー大佐」の演奏

安藤 聖 香（黒松西）

私にとって、長谷小学校での一番の思い出は、何といても合奏のことです。

小学校三年のときは、遅くまで学校に残って、流（みず）先生とピアノの練習をしたものでした。その当時、ピアノを買ってもらっていなかった私には、音楽室の新しいピアノをひけることが、うれしくてたまりませんでした。人前で、絶対涙を見せることのなかった私だったので、流先生が転任されるときは、先生に抱きしめられて思いきり泣いたことを覚えています。

五年になって、私達の学年は、いつも時間があくと、合奏の練習をするようになりました。練習は、放課後にまでおよぶときもありました。みんな一生懸命で、どうしてもできなかったフレーズができるようになったときのうれしさは、今でも忘れられません。

そして、六年の最後のPTAの時は、演奏会もできました。「喜びの行進」、「わらの中の七面鳥」、「トロイカ」、そして、練習するのに最も時間をかけた、バッハの「メヌエット」、「ボギー大佐」などを演奏しました。アンコールで、得意の「ボギー大佐」を演奏し終えたときの、みんなの満足した顔は、生涯忘れないでしょう。

卒業式のとき、「合奏の大好きな、学年でした。」と、教頭先生がおっしゃいました。今でも、小学校のときの友達に会うと、あときは、楽しかったなあ、もう一度やりたいものだなあとよく話します。

私は、音楽を少しでも知っていて、本当に良かったと思っています。なぜなら、音楽は、世界共通語だからです。通訳などなしに、お互いに、何か通じ合うことができるのです。

私達は、一つの曲を、みんなで作りあげて演奏することによって、聴く人に何か伝えることが出来たと信じています。

私は、一生、音楽とかかわっていったなら、それほど幸せなことはないと思っています。そして、第九十回卒業生のみんなが、一曲を仕上げたときのよろこびを忘れないで、校歌にもあるように、高く登ることを祈っています。

